

九州環境管理協会と共に歩んだ12年

九州大学名誉教授 高島良正*

私が九州大学理学部での39年間の務めを終え、九州環境管理協会に着任したのは平成5年(1993)のことで、それから早や12年、ここでまた定年を迎え、平成17年5月末日をもって退職することとなった。九州大学を去る時はまだ若く、元気でこれから九環協で頑張ろうという気概に燃え、何ら不安も淋しさも感じられなかったが、今は体力的にも衰え、これから先いかに生きるべきかを思索する昨今である。昔、在原業平は「終に行く道とは予ねて聞きしかど、きのう、きょうとは思わざりしを」と歌っているが、正にそのような心境で、過ぎ去った75年の歳月は果して有意義だったのかどうか思い悩まざるを得ない。

私は九大では理学部化学科に所属し、あまり実社会と係りのない研究をやっていたが、昭和49年頃(1974)、当時福岡教育大助教授の大嶋文男氏から九環協のことを聞かされ、常任理事に就任するように誘われた。あまり乗り気ではなかったが、ただ名前を出すだけであれば、差し支えないと思って引き受けてしまった。月に一度の常任理事会も欠席しがちであったが、ある時理事長の元九大学長の山田稷先生から会議には1分たりとも遅れないようにしろと叱責され、それ以来九環協の仕事を真面目にやるようになった。やっているうちに九環協の事は大学と違った面白さがあることが分かり、次第にのめり込むようになった。九環協は30人余りの大学教授が理事となって運営される財団法人で、当時はこのような環境問題を取り扱う団体は全国でも殆んどなかった。理事はそれぞれ違った大学、学部の人を集

まりであったから、直接業務に当たらせるのは不可能であった。そこで福岡教育大学の細川巖教授と九大の竹下健次郎教授が中心となり、事務系に小林博之氏(後の専務理事)と技術系に白石直典氏(後の理事・技術部長)を招聘され、他は十数名の20歳代の職員を雇入れて分析・測定などの業務を開始された。この揺籃期には人事面、財政面、業務面で筆舌に尽くし難い苦勞があり、私が出席した常任理事会でも、理事の間の大声での論争もある程であった。常任理事を引き受けた時の思いとは全く異なり、常任理事は協会の業務を探したり、補助金の獲得に奔走しなければならなかった。私は九州内では九州電力の業務や補助金を受け、国レベルでは科学技術庁や日本船舶振興会からの補助金獲得に努めた。

以上のような協会設立10年くらいの時と比べると、九大定年後の12年間は大海原に行く巨艦に乗っているようなものであった。特に環境問題の重要性が認識され、業務が右肩上がりに拡大し、良い人材も得られるようになった。すなわち、創立当初のように基盤の不安定さは無く、九環協存続の危機に至ることは考えられない状態に達していた。しかし協会の内部を見ると建物は古く、管理棟を除けば古い木造の小学校みたいな建物で、外部の人から見ればこの中でppbオーダの精密分析ができるのだろうかと危ぶまれるような薄汚いものであった。そこで先ず平成8年、創立25周年を記念して約1500㎡の実験研究棟(4号館)を完成させ、更に平成13年、30周年にも約2000㎡の研究棟(1号館)を新築して今の姿になった。このような職場環境の大幅な改善と

* (財)九州環境管理協会 理事長

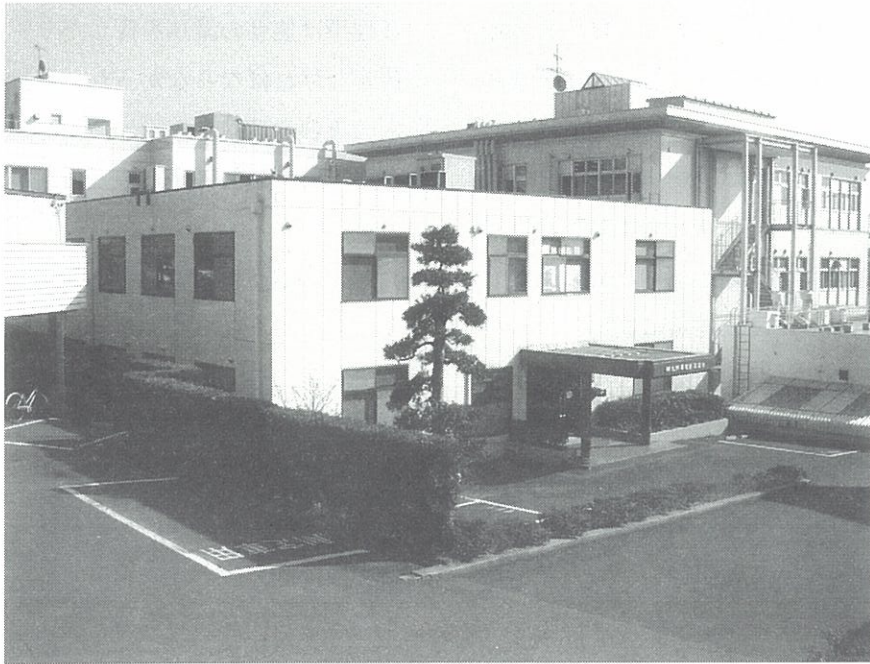
設備充実により業務もいろいろな環境分野に拡大し、発展を続けている。

しかし、「驕れる者は久しからず」という格言があるように、好況に酔いしれていると、いつの間にか夢のように不況に陥ることもあり得るのである。今、国や地方自治体の財政難をみると、このまま九環協に何の影響も受けず時が過ぎるとは考えられない。企業体に好・不況はつきもので、たとえ不況に襲われても何ら恐れることはない。今の九環協には

新入社員から定年に近い幅広い人材がいるから、逆境という壁を打ち破る英知と実行力が芽生えて乗り越えることができる筈である。そして九環協を永續させ、職員各自の幸せを求められることを切望する。

終わりに孔子の名言を記して巻頭の言葉とする。

若くして学べば壮にして為すあり
壮にして学べば老いて衰えず
老いて学べば死して朽ちず



九州環境管理協会全景